

石川裕之著

『韓国の才能教育制度—その構造と機能—』

(東信堂, 2011年, 340頁)

大膳 司 (広島大学)

本書が分析の中心とする時期は、韓国の一般学校教育制度が中等教育段階における教育の機会均等化政策を本格的に推進し始める直前の60年代から、盧武鉉政権が終了した2008年2月までである。

本著書は、4つの研究課題を設定している。

第1の課題は、才能教育制度の現状とその特徴について明らかにすることである。

第2の課題は、才能教育制度の歴史的展開とその構造の変化について、明らかにすることにある。

第3の課題は、公教育制度において才能教育制度が果たす機能とその意味を、明らかにすることにある。

第4の課題は、韓国の才能教育制度における明示的な理念や目的と矛盾するような、みえにくくなっている機能について明らかにすることにある。

## 目次

本書は序章を除いて7つの章から成り立っている。

はしがき

序章 研究の目的と課題

第1章 一般学校教育制度の構造と選抜システム

第2章 才能教育制度の登場と初期の選抜システム

—「平準化」の補完策としての科学高校の成立—

第3章 才能教育制度の量的拡大と構造変容

第4章 新たな才能教育制度の構築

—英才教育振興法の制度とその背景に注目して—

第5章 新たな才能教育機関の運営実態と

選抜システムの複合化

第6章 アクセラレーションが果たす機能

—高校早期卒業・大学早期入学制度を中心に—

最終章 才能教育制度の構造と機能

## 各章の内容

第1章では、一般学校教育制度がどのような構造と機能を持っているのかについて、その選抜システムと進学ルートの変遷に注目して検討されている。

70年代以前の韓国の一般学校教育制度においては、決定的な選抜の機会が中学校進学段階、高校進学段階、大学進学段階の各段階に存在しており、そこでは厳しい競争と選抜が繰り返され、その結果に応じて各学校は細かく序列化されていた。

しかし70年代の入試制度改革とその後の上級進学率の上昇によって、中等教育段階以下における選抜性は急速に低下していった。一般学校教育制度において競争・選抜・序列化原理が働いているのは、高等教育段階のみとなっていった。

韓国がこの間、一般学校教育制度において教育の機会均等化原理をひたすら追求してきたことの裏返しとして、一般学校教育制度の選抜・教育・分配機能は低下し、

経済発展に不可欠な科学技術分野を初めとする各分野・領域の高度なマンパワーの効率的育成も困難になっていった。一般学校教育制度において、競争・選抜・序列化を志向する国民の激しいエネルギーを吸収する機会が大学進学段階にしか存在しておらず、果たして大学入試のみでそうした膨大なエネルギーを解消しうるのかについても疑問が残った。

第2章では、韓国で80年代初めに才能教育制度が登場した背景について考察し、初期の科学高校の性格と特徴について明らかにされた。

才能教育制度の登場、すなわち科学高校の設立に決定的な影響を及ぼしたのは、70代後半になって浮上した「平準化」（高校格差の解消）の副作用の問題であった。「平準化」の導入によって一般学校教育制度内では学級が異質集団化し、「下向平準化」が問題となり、将来の経済発展をリードする可能性を秘めた数学・科学分野の才能児の潜在的な才能が損なわれる可能性も高まった。こうした状況の中、従来から存在した科学技術分野における高度なマンパワー育成という目的に加え、「平準化」の補完という新たな大義名分を手に入れたことで科学高校の設立が実現し、才能教育制度が登場した。

また、選抜システムと進学ルートから80年代における才能教育制度の構造と機能について検討された結果、科学高校の設立によって「科学高校→KAIST（韓国科学技術院）」という「分岐型Ⅰ」ルートが形成された。公教育制度全体における「分岐型Ⅰ」ルートの出現は、一般学校教育制度の外側に選抜性の高い決定的な選抜の機会が新たに生じたという意味を持っていた。一方でその量的規模が小さかったため、才能児の能力と適性に応じた教育機会の提供という点では限界があったし、韓国社会における才能教育制度の存在感も希薄であった。

第3章では、90年代の才能教育制度の構造変容過程とその制度的・政策的背景について考察された。

90年代は科学高校を初めとする特殊目的高校が受験名門校化し、才能教育制度が大きな社会的葛藤を生じさせた時期であった。しかし同時に、才能教育制度がめざましい量的拡大を遂げ、教育システムとしての自立性とプレゼンスを高めた時期でもあった。また、この時期、才能教育制度の構造に「科学高校→一般大学」という「還流型Ⅰ」の進学ルートが出現し重要な役割を果たしたとともに、それが一般系高校卒業生の進学機会を圧迫したことで大きな批判を浴び、才能教育制度が混乱に陥る一因が作り出された。「平準化」改革が発端となってもたらされた韓国における才能教育制度の構造変容の過程

は、才能教育制度の構造や機能が、才能教育独自の理念や目的のみによって決定されるのではなく、当該国の公教育制度の中で、社会的文脈や時代的背景、その他の教育システムとの関係性に強く規定されつつ形成されていくことが明らかにされた。

第4章では、2000年に制定された韓国初の才能教育関連法である英才教育振興法の制定とその背景に注目し、同法に基づく新たな才能教育制度の構築の方向性について明らかにされた。

すなわち、2000年代以降の韓国では、最も優秀な層の才能児を全国から選び出し、彼らを世界的な競争力を持つ人材（ノーベル賞級の科学者）に育て上げるための国家的な才能教育制度の構築が進められていた。その契機となったのが、1997年のIMF危機であった。韓国における才能教育制度の理念にはその登場時点から、「平準化」の下でその才能を損なわれかねない才能児の教育機会を保障するという「適能教育主義」と、科学技術分野における高度なマンパワーを育成するという「国際競争主義・科学ノーベル賞型」の両側面が存在しており、90年代までは前者が才能教育制度発展の主たる原動力であった。しかし2000年代以降は、グローバル化・情報化の進展という強力な「外圧」によって、才能教育に対する社会的要請の重点が前者から後者へと移っていった。

第5章では、英才教育振興法に基づく新たな才能教育機関（英才学校・英才教育院・英才学級）の運営実態についてケース・スタディをまじえて検討された。これにより、2000年代の才能教育制度においては、教育の機会均等化原理を追求してきた一般学校教育制度とは対照的に、競争・選抜・序列化原理が強く働いていることが明らかにされた。

第6章では、韓国の才能教育制度においてアクセラレーション（促進教育）が果たす機能について、特に高校早期卒業・大学早期入学制度に焦点を当て、現地調査の結果をふまえて検討された。

80年代半ば以降、才能児の早期発掘・育成を目的に制度化されていったアクセラレーションであったが、実際には「就学前→初等学校就学」と「高校卒業→大学入学」の2つのポイントでしか働いておらず、年齢規範の強い社会におけるアクセラレーション実施の難しさが明らかにされた。一方で、高校早期卒業・大学早期入学制度については、科学高校生の受験戦略や大学の学生獲得戦略として利用されている一面があったものの、「還流型II」ルートを形成することで才能教育制度における進学ルートとして比較的望ましい機能を果たしていた。このよう

に、導入時の意図とは異なるところでアクセラレーションが才能教育制度に貢献していった。

終章においては、第1章から第6章までの論考をふまえ、韓国の才能教育制度について総合的に考察し、その構造と機能について考察された。

## おわりに

本書は、英才教育の視点からの韓国教育史である。

私の理解では、韓国の英才教育は、高校教育制度の平準化によって潜在化した有能な高校生を求める社会とその高校生が優秀な教育を受けたいという希望に基づいて成立した制度であり、優秀な人材発掘のために国家プロジェクトとして展開されている。

日本でも、英才教育という名前を冠した教育制度は盛んではないが、昔から、有能な子どもを、中学校進学時や、高校進学時に、受験という形で発掘し、優秀な学習機会を提供している。このような優秀な学習機会は、私立学校だけではなく、国立大学附属学校や公立の中高一貫校など多様な形態で提供されている。

では、どちらの制度が有能な人材を排出するに適切な制度なのであろうか。

OECD生徒の学習到達度調査結果は、どちらかといえば韓国が日本を上回っているけれども、両国とも上位に位置している。

ノーベル賞受賞者数からみると、日本ではこの数年間で数名のノーベル賞受賞者を輩出しているけれども、韓国では皆無である。

近年の経済状況を見ると、韓国の一部の財閥系企業が、日本の優良企業を追い抜いた、とのニュースが流れており、韓国の経済人材の優位性が想像される。

ここ数年間、韓国はOECD加盟国で自殺率が最も高い。青少年の自殺が増え続けており、その要因の一つに学歴を重視する「大学入試が全ての成績競争」の社会文化に問題があると指摘されている。

本書を読みながら、教育制度を扱う際には、その発生要因だけでなく、その効果や影響の面からも議論する必要があるのではないかとふと思った。

国際的に経済競争が激しくなっており、その中で日本が生き残るためには、優秀な人材の育成が重要な施策の一つと考えられる。今後の人材育成のあり方に興味のある研究者には一読をすすめた。